

# ～新たな挑戦に向けて

- 2 ポスト京都議定書
- 3 国内環境政策
- 4 温室効果ガス排出削減対策
- 5 生物多様性
- 6 自治体の先進事例 / 大学の研究室から
- 7 土壌・地下水環境
- 8 都市資源開発
- 9 リサイクルの現実
- 10 環境配慮設計・環境配慮工場
- 11 スーパークールビズ
- 12 省エネルギー・節電
- 13 省エネルギー・節電
- 14 燃料電池
- 15 工コカー
- 16 再生可能エネルギー / 風力
- 17 再生可能エネルギー / 太陽
- 18 再生可能エネルギー / バイオマス・地熱・小水力
- 19 スマートグリッド / 国内先進事例
- 20 スマートグリッド / 国際展開

## 地球環境



青森県に立地する風力発電施設  
の運営は「夏の軽装み込み」  
で運営を開始する。この運営は、  
これまでの運営と比べて、運営費用を大幅に削減する。  
また、運営期間中の運営費用を削減する。  
運営期間中の運営費用を削減する。



2011年は地球環境を巡る取り組みで転換の年となるかも知れない。

日本は11年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた。これを機にエネルギー政策の見直し議論が熱を帯びる。今夏は電力需給のバランスの悪化が予想され、省エネルギー・節電が大命題となっている。再生可能エネルギーはエネルギー政策の新しい柱の一つとして、技術革新と普及がさらに進むことが期待されている。

その一方で今年11月末に南アフリカで開かれる国連

気候変動枠組み条約第17回締約国会議(COP17)で焦点となる13年以降の国際枠組みの事前交渉は、停滞している。国内の温室効果ガス25%排出削減目標も東日本大震災の発生で揺らいでいる。

10年10月に名古屋市で開かれた生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で最大の成果とも言える「名古屋議定書」の採択。日本政府は今年5月に同議定書に署名した。11年は国連が定める国際森林年。森林を適切に保全し、持続可能な形で利用していくか。企業レベル、個人レベルも対応が問われている。

## 問題

科学は世界経済に  
何ができるか。

大統領も認めている。マネーゲームは終わった。

環境分野への投資が、次の世界を動かしてゆく。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。それは、旭化成が発明した環境技術です。

グリーン・ニューディールという新語に象徴されるように、今、環境のための技術が、

経済成長の役割も担おうとしている。はたして、その期待に応えられる技術が、世界にどれだけあるだろう。

電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池。これは、1985年、旭化成の吉野彰が発明した。多くの科学者があきらめてきた新たな二次電池(充電可能な電池)の開発。

そこでは、正極、負極に用いる素材の問題が極めて大きい。吉野の発明は、様々な素材技術を持つ旭化成ならではと言えるかもしれない。

(現在、リチウムイオン電池内のセパレーターは世界シェア1位である)蓄電量が大きい。軽量である。有害物質を含まないなど、優れた性能を持つこの電池の誕生で、  
パソコンなどのモバイル化が一気に進んだ。そして今、電気自動車が走り始めている。人々の期待をのせて。

旭化成は考える。長年培ってきた環境技術で、もっと世界と競い合おう。それが、この国の次の成長につながる。そして、世界の経済を活性化してゆく。

昨日まで世界になかったもの「リチウムイオン電池」。詳しくは [www.asahi-kasei.co.jp](http://www.asahi-kasei.co.jp)

今まで世界になかったものを。

**AsahiKASEI**